Osaka University Knowledge Archive

Title	1950年代のリートフェルトのデザイン : 航空機のインテリアデザインに見られる色彩デザイン
Author(s)	村井, 博
Citation	デザイン理論. 2004, 45, p. 82-83
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52901
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

1950年代のリートフェルトのデザイン
── 航空機のインテリアデザインに見られる色彩デザイン ──

村井　博／大阪芸術大学大学院芸術文化研究科博士課程（後期）

ヘリット・トーマス・リートフェルト（1888-1964）は，デ・ステイルに関与した建築家・デザイナーとして一般に知られている。リートフェルトを語る上で，デ・ステイルとの関係性を抜きにして語ることはできないが，彼の色彩の扱いには，デ・ステイルからは幾分ながら切り離して考える必要のある，彼特有の色彩観が潜んでいると考えられる。

そこで本発表では，彼が手がけた子供用の家具や玩具の分析を通して彼特有の色彩観を明らかにするとともに，さらに彼が再び色彩デザインに取り組む1950年代の作例を取り上げ再検討し，リートフェルトの色彩デザインの基本的な方向性について考察する。

リートフェルトの子供用の家具

1923年頃に三原色を用いて着色された《レッド／ブルー・チェア》は，塗装の色彩によって，木材としての素材感を表面上失っている。木材で出来ているという先入観なしでこの椅子を見れば，この椅子が何か別の素材でできているのではないかという錯覚すら我々は抱く。さらに，その要素構成的な構造と原色から玩具のブロックが思い起こされ，我々は何かしらの「楽しい」印象，つまり色彩から受ける心理的な高揚感を抱く。

このような効果は，建築においてさらに顕著であり，1924年の《シュレーダー邸》でも，色彩の力により，「楽しい」雰囲気があることは否定できない。色彩それも原色をこの住宅に，これほど積極的に採用することができた大きな要因の一つには，リートフェルトが，シュレーダー夫人の子供たちを喜ばせることを期待したことが考えられる。

子供を対象にした色彩の採用ということに関していえば，リートフェルトは多くの子供用の家具や玩具を手掛けている。それら子供用の家具や玩具の中には，装飾的な要素を含んだものが多い。そこから考えれば，彼の色彩の使用は，子供用の家具や玩具のデザインを通して発展してきたと考えることが可能であり，さらに色彩の使用全般に関して言えば，子供用の家具や玩具における装飾要素と同じ働きを，彼は色彩にも期待していたようである。つまり，色彩デザインの「娯楽性」が期待されていたのではないだろうか。

1950年代の航空機インテリアデザイン

1920年代半ば以降リートフェルトは，家具やインテリアデザイン，さらには建築デザインにおいて，色彩を積極的に使用しなくなってしまう。しかし長い時期を経て，戦後，1950年代後半に入ると，建築や家具やインテリアのデザインにおいて，リートフェルトは再び色彩を取り入れたデザインにも取り組むようになる。その代表的なものの中に，いくつかの航空機のインテリアデザインがあり，ここにおいて彼の色彩デザインの本質を垣間見ることが出来るのである。

リートフェルトは1955年株式会社オランダ王立航空機製作所フォッカーから，新しいF.27型機のためにインテリアをデザインするように依頼を受け，1957年には，ＫＬＭ社から新しいロッキード社エレクトラ機とダグラス社 DC-7C 型機及び DC-8 型機のために設計をするように依頼された。これらのインテリ

アデザインを詳しく見れば，以前の彼の色彩の使用法と異なる大きな二つの点に気付く。第一に，空間における平面上で色彩によって色面の構成を行い，その平面を分割している点である。第二に，使用されている色彩の種類の変化である。以前は見られることの少なかった緑と，これまでは採用されることのなかったパステルトーンがこれら航空機のインテリアデザインでは採用されている。

このような変化の要因は幾つか考えられる。一つには，1950年代のオランダで起こっていた「色彩運動」と呼ばれる社会現象との関連がある。二つ目には，これらの航空機のインテリアデザインには，空間的な制約，つまり細長いチューブ状の閉鎖的な内部空間を克服する必要があったということである。圧迫感のあるあの閉鎖的な空間を打破し，少しでも快適な空間を生み出そうとして，彼が辿り着いた解決法がこれらの変化であったのだ。三つ目には，そのような快適な空間の実現のために，子供用の家具のデザインにおいて色彩に期待した，色彩のもつ「娯楽性」を，航空機のインテリアという大人の退屈な空間に持ち込んだということである。それにより，まず目を楽しませることで，空間的な制限から注意をそらし，さらに，色面を用いた空間分割をいろいろと試行錯誤することで，空間の閉鎖的な圧迫感を取り除こうと試みていたのだ。原色のみならず，パステルトーンを用いたことでその効果はより増大していたのである。

1960年にリートフェルトは，シッケンス賞という，建築と色彩の統合という分野においてとりわけ業績のあった者に贈られる賞を受賞している。リートフェルトが積極的に色彩を建築や家具デザインに採用したのは，彼のキャリア全体から考えるとほんの一部分でしかない。にもかかわらず，彼がこのような評価を受けるのは，それだけ彼の色彩デザインが我々を魅了し，我々はそれを享受し，楽しんでいるからであると言わなければならないのであろう。